



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集

テラコッタの時代

vol. **23** | 季刊 **春**
2012





INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

01 [特集] テラコッタの時代

対談 坂井基樹 × 辻孝二郎

TOPICS

06 「建築陶器のはじまり館」オープン

LIVE SCHEDULE

これからの催し

07 企画展 ミントンのタイル 千変万化の彩り
ゴールデンウィーク特別イベント みんなでシャボン玉を飛ばそう
INAXライブミュージアム フォトコンテスト2012

LIVE REPORT

開催報告

08 企画展 「青」「青の魅惑」関連ワークショップ
バンダナを藍で幾何学模様染めよう
3月22日、来館者100万人を達成
常滑 春の山車まつり 6台の山車がライブミュージアムに勢揃い

09 ワークショップ 土と足で遊ぶアート体験
みんなで作品を作ろう!!
EXHIBITION 完成した作品の展示
常滑西小学校平成23年度卒業制作展「絆のタイル」

CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS
LETTER

vol.23 季刊 春
2012

表紙写真

常設展示、企画展のほか、さまざまな教室、ワークショップなど、常にライブな体験ができるライブミュージアム。子どもたちを対象にした、土の絵具を使ったワークショップ「土と足で遊ぶアート体験」の一コマから。

(2012.3.25)

撮影：加藤弘一

[特集]

テラコッタの時代

辻孝二郎が語ります。

テラコッタを生み出した時代とは。テラコッタの建物は今なにを語るのか。やきものに関する本を手がけてきた編集者・坂井基樹さんとライブミュージアム館長・辻孝二郎が語ります。

ビルの谷間を歩いていると、ふと「空気が変わった」と感じる一角に出ることがある。なぜかと思えば、そこには、びかびかした新しいビルとは違う、重厚で歴史を感じる建物が建っているのだ。その柱、庇の下、窓の周り、バルコニーなどは、抽象的な花や草木、幾何学模様、ときには動物の顔で装飾され、見飽きることはない。これらの巨大なやきものは「テラコッタ」。大正末期から昭和初期の約20年、歴史の中で華麗に花開いた日本の建築文化のひとつだ。

常滑から*

22

光るどろだんご全国大会 セントレア賞特別展示



中部国際空港(セントレア)の4階オープンデッキ入口近くの黒い展示台に、2つの光るどろだんごが飾られています。INAXライブミュージアムで2006年のオープン以来9万人を超える方々に体験いただいている光るどろだんご教室では、2009年からANA(全日本空輸)・セントレアとの共催で全国大会を開催しています。このどろだんごは、2010年と11年の全国大会でセントレア賞を受賞したものです。

どろだんごを丸めて磨く行為はものづくりの原点でもあり、全国大会に出場した選手たちは、さまざまな創意工夫を取り入れて、自分だけのどろだんごを完成させました。できあがったどろだんごはどれも個性豊かで、審査員たちは受賞者を決定するのにも苦労していたようです。展示されている2つのどろだんごは、セントレアにふさわしいものとして選ばれた作品で、それぞれの受賞者にも、作品に込めた思いを書いていただいています。ぜひセントレアに行かれた際にはご覧になってください。

後藤 泰男 (ミュージアム推進GGL)

* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



坂井 基樹
坂井編集企画事務所
代表取締役(写真/左)

辻 孝二郎
INAXライブミュージアム館長
(写真/右)

西洋建築の 日本化を示す テラコッタの出現

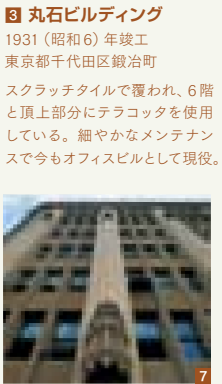
辻 ◎ 日本でテラコッタ建築が盛んにつくられるようになったのは大正時代末期から。ピークは1928〜30(昭和3〜5)年です。その背景には、日本社会の富の蓄積、豊かさがあつたのではないかと思います。ちょうど日本の産業革命が完成し、鉄、織物、やきものなどの産業が輸出産業になってきたと言われる時代です。

坂井 ◆ 明治になって日本で洋風の建築が建てられるようになり、やがてお雇い外国人に学んだ日本人建築家が登場します。当初はヨーロッパの建築様式のままであることが求められました。それが第一世代。その弟子たちの第二世代、第三世代と下がるにつれて日本化していきます。1923(大正12)年の関東大震災のとき、煉瓦造りは危ないという考え

煉瓦造りの西洋建築とは全く異なるものでした。ホールでも廊下でも、土や石の素材感が目に飛び込んで来る。しかしこれこそが、日本人の心象に合ったのではないのでしょうか。ホテルに来るお客さんたちが感動する前に、テラコッタやスタレ煉瓦をつくった職人たちにまず火がついて心を動かし、この傑作が誕生したのだと思います。帝国ホテル旧本館とテラコッタの出現は、明治維新から半世紀かかって洋風の建築がようやく日本人の骨肉となった、その最初だったと言ってもいいのではないのでしょうか。

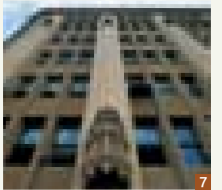
「今日は帝劇、明日は三越」 時代の高揚感を鼓舞して

坂井 ◆ 関東大震災後の街で注目したいのは、日比谷・有楽町・銀座界隈の百貨店と劇場、当時の人たちの憧れの場所です。同時にそのほとんどがテラコッタ建築でした。復興院総裁の後藤新平の復興計画が実現した数少ないゾーンでもあります。復興のシンボルの一つ、日比谷公会堂・市政会館は、建築家・佐藤功一が設計をしています。ここは研究機関であると同時に、海外のオーケストラがやってきたクラシックの殿堂でした。その近くには阪急電鉄の小林一三が東京宝塚劇場をつくります。そして、何と言っても中心である帝国劇場、日本劇場、日本のブロードウェイと言われたのも納得がいきます。このゾーンの真ん中に、テラコッタが見事だった朝日生命館(旧常盤生命館)。よくこんな面倒なことを



丸石ビルディング
1931(昭和6)年竣工
東京都千代田区鍛冶町

スクラッチタイルで覆われ、6階と頂上部分にテラコッタを使用している。細やかなメンテナンスで今もオフィスビルとして現役。

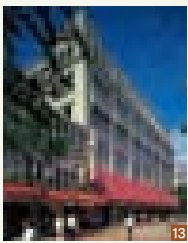
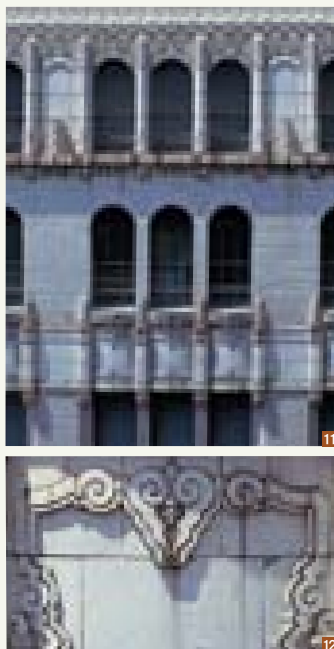


朝日生命館(旧常盤生命館)
1930(昭和5)年竣工
東京都千代田区有楽町

外観のほぼ全体がテラコッタとスクラッチタイルで覆われ、さまざまな様式の建ち並ぶ昭和初期の日比谷界隈でもひととき異彩を放っていた。



帝国ホテル旧本館
1923(大正12)年竣工
東京都千代田区内幸町
1890(明治23)年に開業した帝国ホテルの新館として完成。写真上は照明・換気用に使われたテラコッタ。写真下は当時の絵葉書より。



10-13
★横浜松坂屋本館
1934(昭和9)年竣工
神奈川県横浜市中区伊勢佐木町
昭和初期の増築から建築家・鈴木禎次が設計。白タイル張りの壁を5階まで立ち上げ、6、7階は白系の釉薬が施されたテラコッタで華やかに飾っていた。

が広まり、鉄筋コンクリート造の建物が一般化します。このときテラコッタが普及し始めました。

辻 ◎ テラコッタはアメリカから来ました。建築も、アメリカが台頭するという流れのなかで脱ヨーロッパしていった。建築家も成熟してきて、日本人として自ら設計して良い建物をつくるんだという時代だったと思います。個人的な意見ですが、それを刺激したのがフランク・ロイド・ライトじゃないかと思うのです。彼の建築を日本人が大好きなのは、日本のデザイン要素を感じるから。たとえばヨーロッパの垂直に伸びていく建築に対して、彼は水平に伸びていく。どこか日本的です。F・L・ライトの帝国ホテル旧本館を見て、日本人だってやってしまえばいいという気持ちになったんじゃないかなあ。

坂井 ◆ 帝国ホテル旧本館の影響力は大きかったと思います。F・L・ライトは新しい素材が好きだったようで、大谷石、スタレ煉瓦、テラコッタを使い、いずれの形も職人の腕を試しているかのような独特な意匠をしていますね。オリジナリティが高く、まさしく帝国ホテルのためのものでした。これらを使ってできた建物は、それまでの

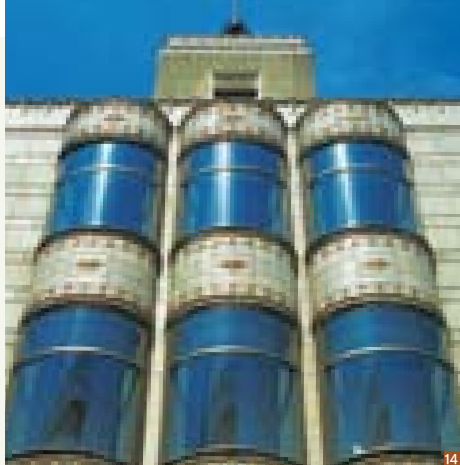
したなあと思う(笑)、手の込んだ代表作です。
辻 ◎ 朝日生命館は有名なテラコッタ建築ですが、わたしは生命保険の会社とあの意匠がどうも腑に落ちなかったんです。でも坂井さんから、もとは「美松」という百貨店だったという話を聞いて納得がきました。

朝日生命館の建築様式はハロッズなど世界のデパート様式そのものです。入っていくとすぐに吹き抜けがあつて、そこからは、もう非日常の世界。以前は「呉服店」という名前、履物を脱いで上がって、奥の方から持ってきた品物を見せられて買うという形だった。それが「百貨店」になると、土足で入店できるようになり、ショーケースに並んだ夢みたいな商品を見てセレクトできるようになった。画期的な楽しみだったでしょうね。

坂井 ◆ 当時は「食堂階ができました」「お子様ランチ開始」「エレベーター設置」「冷房完備」ということが売りになり、「百貨店間で競いあい、同時にPRになっていました。

辻 ◎ それも、今まで経験のなかった高揚感でしょう。何もなかったところにいきなり新しい世界が現れて、そこに入って行けるような。現在は、これまでの延長線上で面白いものが出てくる感じですけれど、感動が違うと思います。

坂井 ◆ 「今日は帝劇、明日は三越」というフレーズがありました。劇場や百貨店は夢のステージで、きれいな服を着て行く。松坂屋も高島屋も三越もテラコッタに覆われて、出迎えてくれるわけです。当時のテラコッタは、お客さんを「ワー！」と言わせ鼓舞する、仕掛けでもあったと思います。

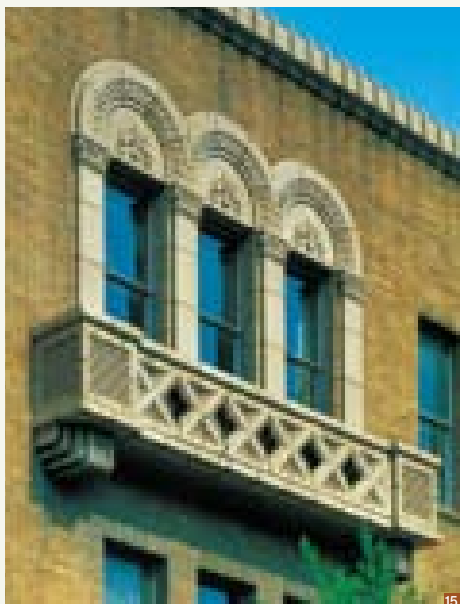


辻 ◉ すごい興奮でしょうね。この時代にタイムスリップして、日比谷や銀座あたりを歩いてみたいですね。

テラコッタに宿る 人の情熱や喜び

辻 ◉ 1983(昭和58)年に伊奈製陶の役員だった故・杉江宗七さんがテラコッタ建築の写真集『美の彷徨』を出版し、大きなインパクトを与えました。以後、我々の先輩たちは、解体されるテラコッタ建築の一部を譲り受けてコレクションするようになります。その熱意がどこからきているかというと、やっぱりテラコッタの魅力です。工業化した製品とはちよっと違って、人の思いや指跡が残っている。極めて大きくて、手づくり要素が強いものに惹かれるんです。

坂井 ◉ 当時は量産するシステムも進み始めていましたが、一方で手間のかかったものを



つくると相応にほめられたのだろうと思うんですよ(笑)。「あんな厄介なことを言うお客さんの要望によく応えられたな」と(笑)。

また昭和初期は「昭和の桃山復興」と言われて、世の中がやきものに目を向けたときです。織部や志野、黄瀬戸が知られるようになります。北大路魯山人や加藤唐九郎、荒川豊蔵が注目され始めたときでした。近隣の岐阜県や同じ愛知県のやきもののお話ですから伊奈製陶で働いていた職人さんたちも、陶芸家に対してきつとライバル心があったのではないかな。テラコッタにつくり手の情熱を感じるものが多いのは、一筋縄ではできないほどの大きさと、昭和初期という時代背景があったことが大きいと思います。

辻 ◉ とくに常滑は、甕など大きいものをつくる技術があります。江戸時代に初代の伊奈長三郎が小さいお皿や徳利をつくったとき、「小細工のもの」という言い方をされたくらいです。「自分の背の高さより大きいものを焼

④ ★富山房

1932(昭和7)年竣工
東京都千代田区神田神保町

⑤ ★名古屋銀行協会

1931(昭和6)年竣工
愛知県名古屋市中区丸の内

⑥ ★東京大学医学研究所

1937(昭和12)年竣工
東京都港区白金台



いたぞ」と、そういう自負がある。確かにテラコッタが常滑のやきもの魂に火をつけたところはあると思いますね。

そして自分が手塩にかけてつくったものが、こういう建物に使われる。これって、すごく嬉しいでしょう。新しいデパートができた新聞に出た。このテラコッタは自分がつくったんだと。こんな幸福感ないですよ(笑)。

坂井 ◉ 1936(昭和11)年に伊奈製陶が出したテラコッタの商品カタログがあります。施工例が見事な写真で紹介されたものです。しかしどう見ても、売るためのものよりは自慢に見えます(笑)。

辻 ◉ どんな要望にもお応えできますって言い切っていますね(笑)。

坂井 ◉ 常滑でつくられたやきものが、大阪の中心地ミナミと難波(大阪劇場、大阪高島屋)そして東京の日本橋(日本橋高島屋)の晴れ舞台を飾っている。「うちでつくりました」と、見せたくなるのは当然ですね。

辻 ◉ シンプルモダンだけでは気持ちは癒されない。やっぱり装飾がほしいわけです。

坂井 ◉ 「モダニズム」は登場以来、いろいろな時代の転換点があったにもかかわらず、100年にわたり「都会的」であり「スマート」の代名詞であり続けました。逆に、装飾はスマートではないと。ところがこの5、6年の絵画ややきもの若い手を見てみると、過剰な装飾に対する拒否感を全く持たない人たちが元氣です。江戸時代や明治時代の過剰な装飾に対しても抵抗感はなく、面白いものは面白い。ようやく変わりつつあるのかなと思います。

辻 ◉ 建築にも新しい動きは見られますね。
坂井 ◉ 2009(平成21)年に日本橋高島屋(1933(昭和8)年開店)が商業建築で初めて国の重要文化財に指定され、またテラコッ

装飾が建築と人間の 関係性を強くする

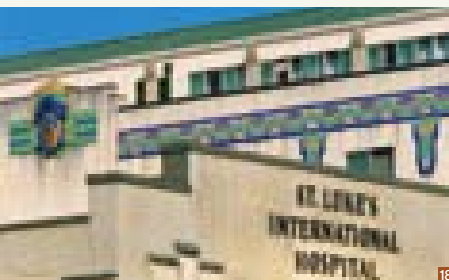
辻 ◉ 採算は合わなかったように聞いていますが、新しい世界に自分たちの技術が使われる喜びは大きかったと思います。

辻 ◉ 関東大震災後、企業は経営的にはリスクもあってしょうが、その復興に莫大なお金をつぎ込んで良い建物をつくりました。この当時できた建物、空間は震災後の人の気持ちに響く部分が大きかったと思います。今のビルが訴えてこないのは、採算性の範囲内ではないんですか。遊びや余裕がない。

坂井 ◉ 昭和初期も今と同じように、「効率」という意識はありました。でも、テラコッタはそれとは逆の存在です。単なる建築の部材にすぎないのに、量産が難しく、原型師から窯焚きに至るまで多くの人が手間をかけてつ

くっています。当然ながら、値の張る部材だったと思いますが、民間のオフィスから商業建築まで街のいたる所に使われています。それらが建っているというのは、街に大きなエネルギーを与えていたと思いますね。単にお金があればできるという話ではない。テラコッタ建築を見ると、ものをつくるのか建物を作るのかということに対して払われた情熱に敬意を感じます。

辻 ◉ これまで古いものをどんどん壊して新しいものをつくっていったけれど、家族の絆と同じで、建物と人間の関係性が大事ではないかと思うのです。もう一度同じものがつくられることはないでしょうが、古いテラコッタ建築を大事にするという気持ちで、建築と人間の関係性につながっていく。今、若い人が古い建物に関心を持っています。それは懐古じゃなくて関係性を求めているのではないかな。関係性を強くするには、装飾の問題は避けて通れないと思います。



⑬ ★名古屋市庁舎
1933(昭和8)年竣工
愛知県名古屋市中区三の丸

⑭ ★聖路加国際病院
1932(昭和7)年竣工
東京都中央区明石町

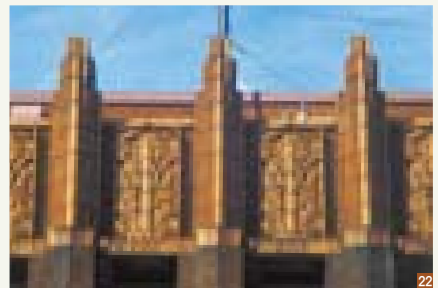
⑮ ★大同生命ビル
1925(大正14)年竣工
大阪府大阪市西区江戸堀

⑯ ★武庫川女子大学甲子園会館(旧甲子園ホテル)
1930(昭和5)年竣工 兵庫県西宮市戸崎町





21



22

タてはありませんが東京駅が戦前の姿に復元されました。建てられた当時の姿に戻しましょうという動きは、懐古趣味や学術研究対象としての範囲を超えて、多くの人に共感を呼んでいます。大正から昭和初期の建物は人の集まる場所のシンボルになることができ、また最近の言葉で言う「地域資源」だと気づいているからでしょう。

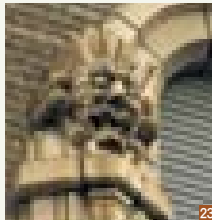
辻 おっしゃるように建築はこれからも変わっていくでしょう。効率だけでは気持ちのいいものじゃないとわかってきた。とくに今回の東日本大震災後の建築のありようは、まさに建物と人間の関係性——人間同士だと「絆」という言い方をしていますが、それが問われている。そのひとつの見本として、古いテラコッタ建築のなかに何かを見いだせるのではないかと思っています。

(2012年3月9日収録)

写真撮影Ⅱ 写真1、2、4、7、10、15、17、19、23 相原功 / 写真18、21 山崎政幸 / 写真3、8、16、20 梶原敬英 / 写真22 高田行庸

坂井基樹 Motoki SAKAI

坂井編集企画事務所代表取締役。1967年岐阜県生まれ。やきもの総合誌『陶磁郎』の副編集長、『つくる陶磁郎』編集長を経て、現在は美術・工芸、食や住まいに関する書籍・展覧会の企画および編集を行っている。近年の編集に、『浜田庄司スタイル』『瀬戸内国際芸術祭2010 記録集』『パウハウス・テイスト パウハウス・キッチン』(美術出版社)、『現代日本の陶芸家』(洋泉社)ほか。INAXライブミュージアム企画委員。建築陶器のはじまり館オープンを機に発刊する『日本のテラコッタ建築』を編集。



23

21 ★大阪ビル一号館

1927 (昭和2) 年竣工
東京都千代田区内幸町

22 ★自治省庁舎

1933 (昭和8) 年竣工
東京都千代田区霞ヶ関

23 ★大日本製菓

1930 (昭和5) 年竣工
大阪府大阪市中央区道修町

TOPICS

「建築陶器のはじまり館」オープン

INAXライブミュージアム活動25周年、そしてランドオープン5周年の記念事業として4月28日、テラコッタの収蔵コレクションを展示する「建築陶器のはじまり館」がオープンします。

屋内展示エリア

20世紀建築界の巨匠、F・L・ライトの代表作の一つ、「帝国ホテル日本館(ライト館)」は、知多半島の土で焼かれたタイルとテラコッタで装飾された建築。関東大震災の災禍からの力強い復興の象徴であり、日本における鉄筋コンクリート造建築と、建築陶器による装飾の時代のさきがけとなりました。

帝国ホテル日本館柱型の実物展示を中心に、9物件のテラコッタを展示します。



屋外展示エリア (テラコッタパーク)

青空の下、今では貴重な文化遺産となったテラコッタに間近で出会えます。1937年に伊奈製陶(後のINAX)が制作した横浜松坂屋のテラコッタ(2m×5m)をはじめ、テラコッタ13物件を、当時の建築写真とともに芝生の広場に展示します。



関連書籍



『日本のテラコッタ建築』
—昭和・震災復興期の装飾—
(4月28日発売予定)

本文104ページ
定価:2,500円(税別)
発行:LIXIL出版

- ◆図版解説 / 米山勇 杉江宗七 ほか
- ◆近代都市とテラコッタ建築 / 鈴木博之
- ◆テラコッタが彩った様式と装飾 / 大嶋信道 ほか